

平成23年度宮古群島病害虫発生予報第12号(3月予報)

I 3月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	40	40	20
平年並	40	40	40
低い(少ない)	20	20	40

(平成24年2月24日付沖縄气象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	20.0	22.7	17.7	137.8	112.0

(沖縄气象台発表・統計期間1981~2010・資料年数30年)

II 3月の発生予報および防除上の注意事項

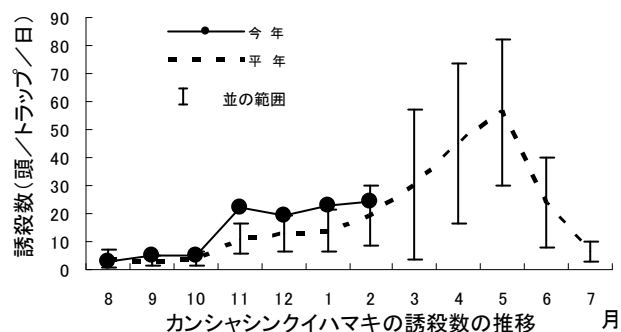
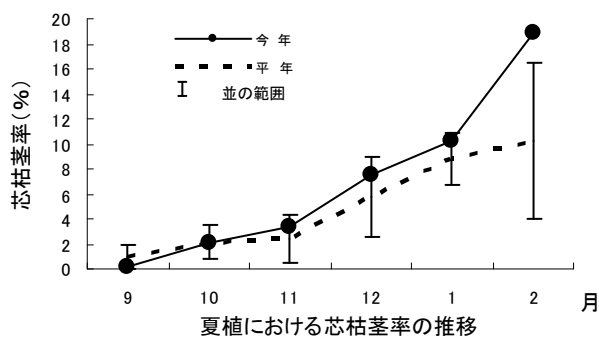
1 さとうきび

(1) メイチュウ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 2月中旬の調査の結果、夏植圃場での芯枯茎率は、18.9%(平年10.3%)と平年より高かった。
- b 2月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモンによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は、24.0頭(前年22.3頭、平年19.6頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 圃場内外のイネ科雑草は本種の発生源となるため除去する。
- c 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、食入初期の防除を徹底する。
- d 夏植えの培土時や春植えの植付時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を施用する。
- e 平成23年度病害虫発生予察注意報第2号(平成23年12月28日付)参照。

- 収穫後圃場におけるカンシャコバナネナガカメムシ(ガイダー)の防除対策
 - a 収穫の際に地上に落下した卵や越冬成虫は地表や株元に残存し、収穫後の株から伸びた幼茎などで生育する。
 - b 卵の死亡率を高め、第1世代の発生を抑制するため、収穫後は耕耘および株出管理を速やかに行う。
- 収穫後圃場におけるケブカアカチャコガネの防除対策
 - a 耕耘によって、株元にいる幼虫の75%程度を殺傷できることから、収穫後は速やかに耕耘し、幼虫密度の低減を図る。
 - b 3齢幼虫は、3月下旬頃から地中深く潜るため、耕耘による防除は本種が地表近くにいる3月中旬までに行うのが効果的である。

2 マンゴー

- 炭疽病の防除対策
 - a 2月中旬の調査の結果、一部の施設で炭疽病の発生がみられた。
 - b 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
 - c 罹病した新鞘、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
 - d 開花～結実期には予防効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。
- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 2月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.1頭（前年0頭、平年0.1頭）と平年並であった。
 - b 開花期以降は本種が増加する可能性があるため、早期発見、早期防除に努める。
 - c 混合花の新葉や不要な新鞘は本種の発生を助長するので、早い時期に摘葉する。
 - d 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
 - e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

3 かぼちゃ

- モザイク病の防除対策
 - a 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
 - b 発病株は発生源となるので、見つけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
 - c 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。
 - d 収穫後の残渣は発生源となるので速やかに片づける。
 - e 平成23年度病害虫発生予察技術情報第8号（平成23年12月28日付）参照。
- 細菌性病害の防除対策
 - a 株元の老葉を除去し、透光・通風をよくする。
 - b 今後の気象条件により、斑点細菌病や褐斑細菌病、葉柄腐敗症などの細菌性病害の発生が助長される場合があるので、防風垣は収穫時まで残し、予防散布と初期防除に努める。
- うどんこ病の防除対策
 - a 株元の老葉を除去し、透光・通風をよくする。
 - b 多発すると防除が困難になるので、葉の表裏をよく観察し、早期防除に努める。
 - c 着果後は防除を徹底し、収穫時まで出来るだけ多くの健全葉を確保する。
 - d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

4 とうがん（施設）

- ミナミキイロアザミウマの防除対策
 - a 2月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭未満（前年0頭）であった。
 - b 発生源となる不要な下葉や圃場内外の雑草を除去する。
 - c 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

5 にがうり（施設）

- うどんこ病の防除対策
 - a 2月下旬の調査の結果、うどんこ病の発病葉率は9.0%（前年8.3%）、発病度は0.4（前年0.4）であった。
 - b 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
 - c 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして持ち出し処分する。
 - d 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
 - e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。